

MATSUDOING2050

まちづくりデザインマップ004案

作成にむけたコメント募集(意見募集②)

横張真(東京大学教授)
宮城俊作(東京大学教授)
秋田典子(千葉大学准教授)
藤村龍至(東京藝術大学准教授)
2020.4.13

2020年4月8日に「MATSUDOING2050」のワークショップに関わってきた専門家(横張・宮城・秋田・藤村の4名)が、参加者の皆様からオンラインでいただいたコメント(別紙)に全て目を通し読み合わせを行なった上で、COVID-19の感染拡大による緊急事態で見てきた新しい課題も踏まえ、これまでの議論を振り返りつつ、新たに前提を問い直す必要性も議論されました。

その上でオンライン上で意見交換し、以下の「5つの問いかけ」と「2つの提案」をまとめ、「まちづくりデザインマップ003案」(別紙)を作成させていただきましたので、ご一読のうえ、コメントをお寄せください。

以下の2つの質問に対し
コメントをお寄せください。
集まったコメントをもとに
「まちづくりデザインマップ004案」を作成します。

Q1

専門家からの「5つの問いかけ」

- (1)「まちなかのサービスと空間は再定義されるべきではないか」
- (2)「まちはそこにしかない繋がりで運営されるべきではないか」
- (3)「まちの公共空間はONとOFFの切り替えが大事なのではないか」
- (4)「郊外のまちの価値は空間の余白にあるのではないか」
- (5)「まちづくりには動く余白が必要なのではないか」

についてコメントをお寄せください

Q2

専門家からの「2つの提案」

- (1)「(仮称)MATSUDOING2050 時空間ゾーニング」という全体の捉え方
- (2)戦略的拠点「(仮称)MATSUDOING2050 VOID」の設定

についてコメントをお寄せください

ご回答は「slido」へ

MATSUDOING2050

まちづくりデザインマップ003案

専門家からの「5つの問いかけ」

(1)「まちなかのサービスと空間は再定義されるべきではないか」

駅前空間の小売飲食への依存からの脱却と「第3の居場所」の再定義について

COVID-19で外出が自粛となって飲食店の危機が伝えられるようになりました。他方で、これまでの駅周辺の土地利用として、駅に近いというだけで集客するような利便性を重視した飲食店や小売に頼りすぎたのかもしれない。自宅や職場とは隔離された心地のよい「第3の居場所(サードプレイス)」が、単なる消費や余暇の空間でなく、リモートワークの場になったり仕事のヒントをもらえる場所になるような、新しい意味を見いだすようになると、駅周辺で提供されるサービスや空間の使い方も変わるのではないのでしょうか。

(2)「まちはそこにしかない繋がりで運営されるべきではないか」

ローカルな人たちとの繋がりで運営されるまちの空間について

「松戸ならではの活用や人と出会いたい」という声が多くありました。外出自粛で市民の行動が変わりつつある現在でも、集客できている店舗は地域の人たちにしっかりと支持されている例が多いと感じます。将来を考えると地元の人たちの繋がりで運営される空間が結局は長続きするのではないのでしょうか。

(3)「まちの公共空間はONとOFFの切り替えが大事なのではないか」

自由に誰かに会ったり「私」に戻れる場所としての公共空間について

「公共空間に文化活動や利便性」などを求める声も多く見られました。テレワークやオンラインでのミーティングが盛んになった昨今を振り返ると、会議や集まりで移動を強いられることから解放されつつある一方でオンラインのコミュニケーションによって「公」と「私」の切り替えが難しくなり、新しいストレスも感じられるようになりました。公共空間には特定の目的のために整備される施設や誰かに会うためだけの空間のほかに、距離を保ちながら他人を感じたり、「私」の時間に戻ったりするON/OFFの切り替えができる公共空間が必要なのではないのでしょうか。

(4)「郊外のまちの価値は空間の余白にあるのではないか」

密な都心と対比される有意な無駄としての余白を持つ郊外の価値について

密集、密接、密閉を避けるということが強く言われるようになり、改めて松戸の市内を見ると、人と人の距離が近い都心とは異なる空間が広がっていることが実感されるようになりました。まちなかの余白も、賑わいを求めて埋め尽くそうとするのではなく、東京にはない松戸らしさとして密な都心と対比される、意味のある余白として捉え、郊外都市の強みとして捉え直すことができるのではないのでしょうか。

(5)「まちづくりには動く余白が必要なのではないか」

長い時間軸の中で動くものを捉えていくことについて

「家族や友人とゆっくり過ごしたい」、というような日常を豊かにしたいという意見が多く見られました。他方で今回の緊急事態を経験したことで社会の大きな変化も実感されるようになり、今後は私たちの日常生活も大きく変化していくことも予想されます。そのような状況で将来像を議論するためには、私たちが「MATSUDO 2050」でなく、「MATSUDOING 2050」と名付けてワークショップを始めたように、「まちづくりデザインマップ」そのものに長期的な時間軸の中で変化を受け入れる「動く余白」のようなものを埋め込んでいくことが必要ではないのでしょうか。

MATSUDOING2050

まちづくりデザインマップ003案

専門家からの「2つの提案」

(1) 「(仮称)MATSUDOING2050 時空間ゾーニング」という全体の捉え方

5つの問いかけをもとに改めてこれまでの「まちづくりデザインマップ」を見ると、長い時間軸で動くものを捉える進行形(MATSUDOING)の戦略が必要であると感じられました。そこで003案では松戸駅周辺地区全体の時空間を3つのスケール(大・中・小)に分けて考えていくことを提案します。

- 1)大スケール：「江戸川の河川空間」と「松戸駅周辺地区」のスケール
- 2)中スケール：「新拠点ゾーン」と「松戸駅前ゾーン」のスケール
- 3)小スケール：新拠点ゾーン内の「南側(公共施設)ゾーン」と「北側(商業)ゾーン」のスケール

3つのスケールについてそれぞれ、前者は長い時間のなかであまり動かない、計画的な使い方がなされる時空間、後者は長い時間のなかで動いていく、暫定的な使い方で余白のような時空間として互いに支えあうような関係として捉えていきます(マップ参照)。

(2)戦略的拠点「(仮称)MATSUDOING2050 VOID」の設定

003案では進行形(MATSUDOING)の戦略が特に表現される場所として新拠点ゾーンを位置付け直し、今後「(仮称)MATSUDOING VOID(余白)」と呼んで以下のように捉えていくことを提案します。

- 1)「まちの中心でもあり、まちへ波及していく繋がり」の起点
- 2)「公／私やON／OFFを切り替え可能な透明なシンボル空間」
- 3)「時間軸の中で動いていく、創造的な余白」

これまでのマップでは駅に近い北側のゾーンは利便性の高い商業拠点施設などの用途、南側のゾーンは公共性の高い防災拠点施設などの用途、と漠然と描かれてきましたが、今回参加者の皆さんから、市民の活動を支える文化施設やギャラリーなどの機能を望む声が多くあげられる一方で、行政が整備するハコモノとして捉えるべきではないという意見も多くいただきました。また、今回の緊急事態のもとで経験した私たちの働き方、暮らし方の行動変容は、容積を積んで商業床を生み出す従来型の再開発では生き残るのは難しいという実感をより確かなものと感じるきっかけとなりました。

今後は、今回のCOVID-19の感染拡大による緊急事態をひとつの契機として捉え、これまでイメージされてきた公共施設、商業施設というような従来型の施設像ではなく、例えばテレワークを前提とした住宅や人びとが活動を持ち込んで互いに経験をシェアできるような新しいライフスタイルを支える新しい空間像を意思ある市民や民間デベロッパーを巻き込んで討議しながら、これまでになかった土地や空間の実験的な使い方を考えていくべきだと考えます。

具体的にはこのゾーンを以下のように「3つのVOID」として位置付けることを提案します。

- 1)北側のゾーン：ポスト2020の新しいライフスタイルを支える試みの場としての「動くVOID」
- 2)中央のゾーン：南北をつなぐオープンスペースである「オープンなVOID」
- 3)南側のゾーン：日常では市民サービスを支えるとともに、災害時には防災拠点としてのHQ機能など人々の生存をささえる「支えるVOID」

以上